



歴史文化基本構想推進事業 瀬戸の魅力再発見 **せと 歴史と文化財を知る見学会**

**郷・旧桜町を歩く**

日時：令和元年 9月 21日 (土)

見学コース：①午前 10時 00分  
(予定時間) 10時 15分

11時 00分

11時 30分

12時 00分

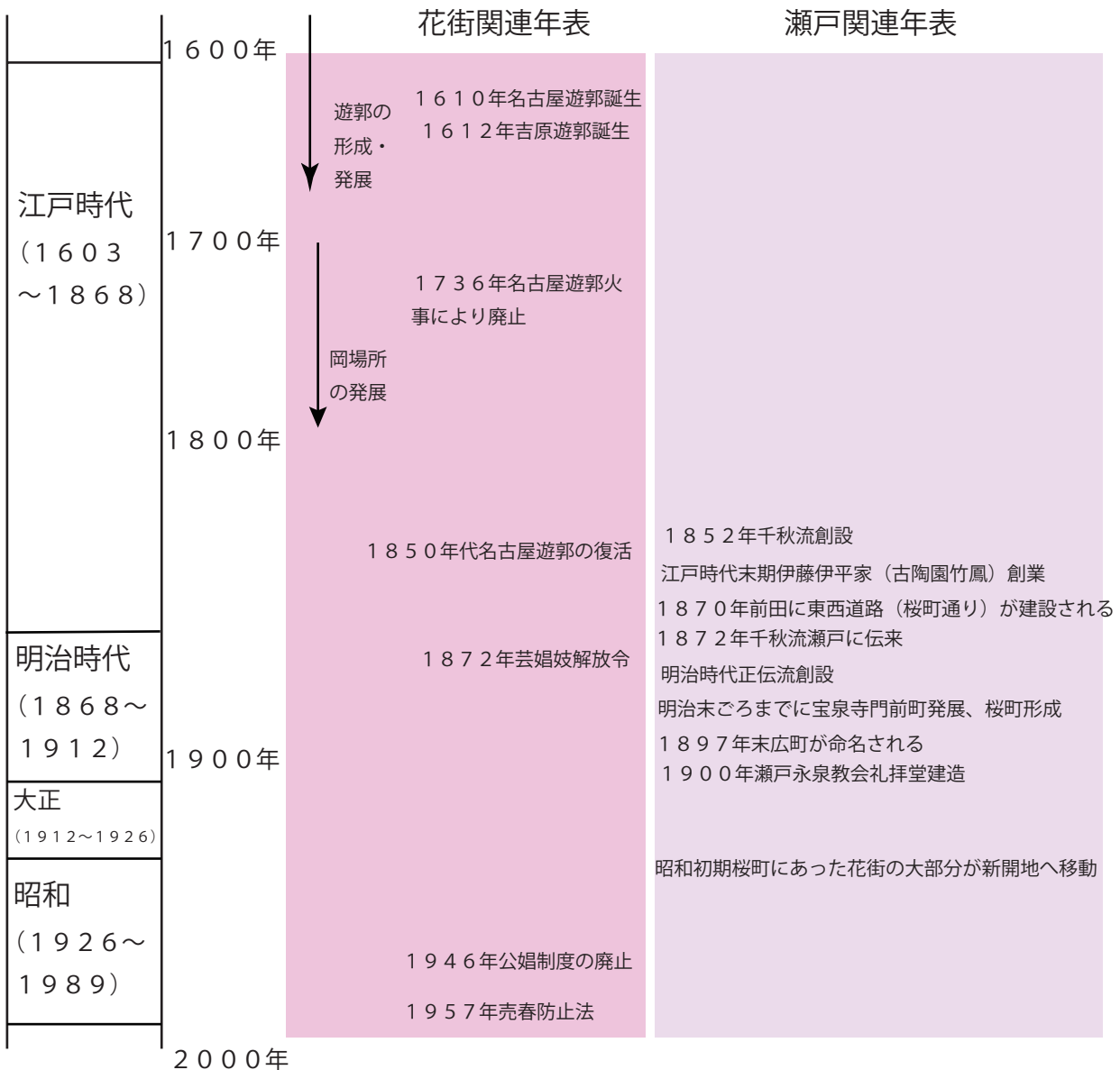
窯垣の小径駐車場集合・出発

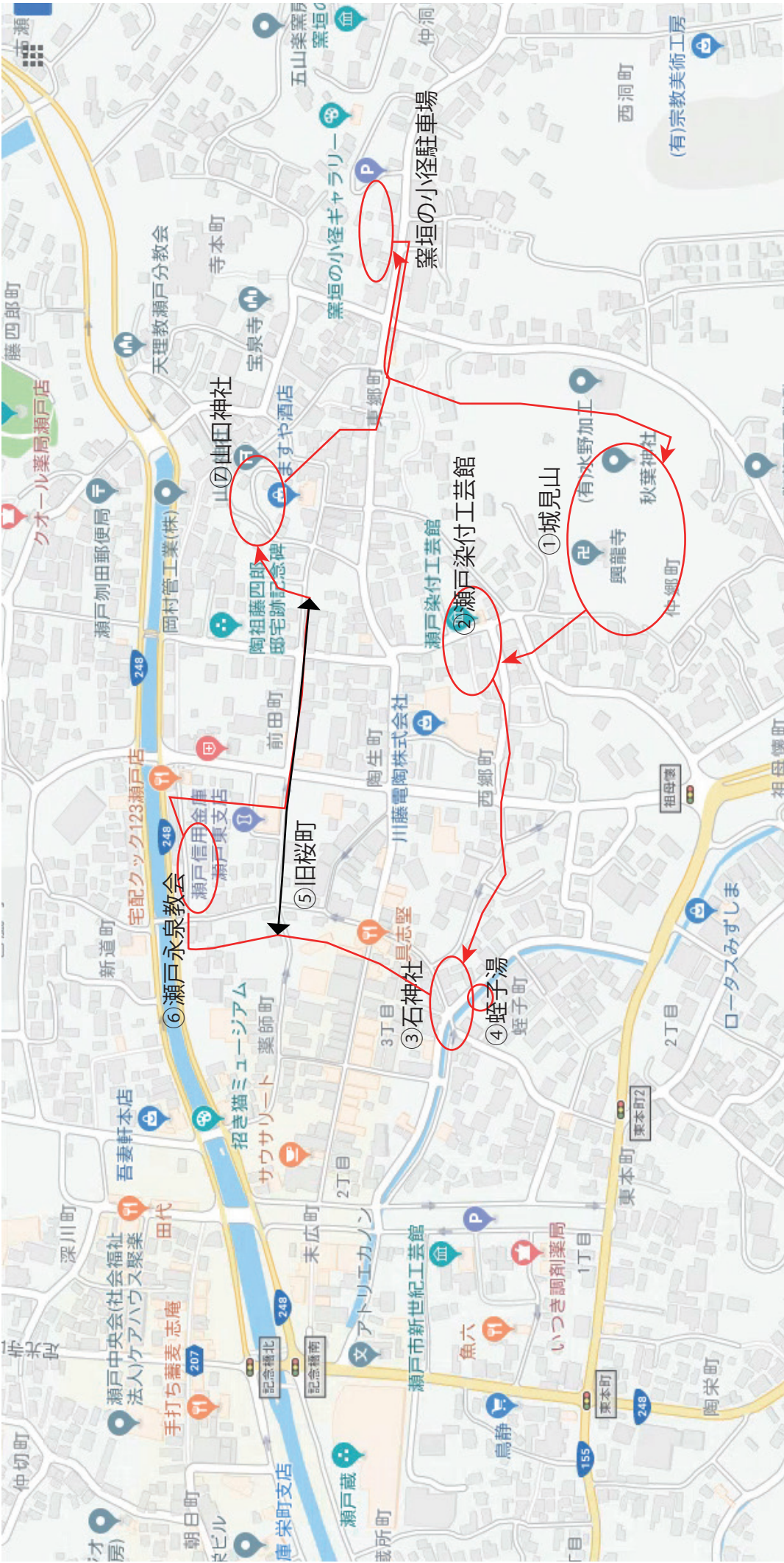
城見山・瀬戸染付工芸館（古窯）解説

石神社・末広通商店街

瀬戸永泉教会・山口神社

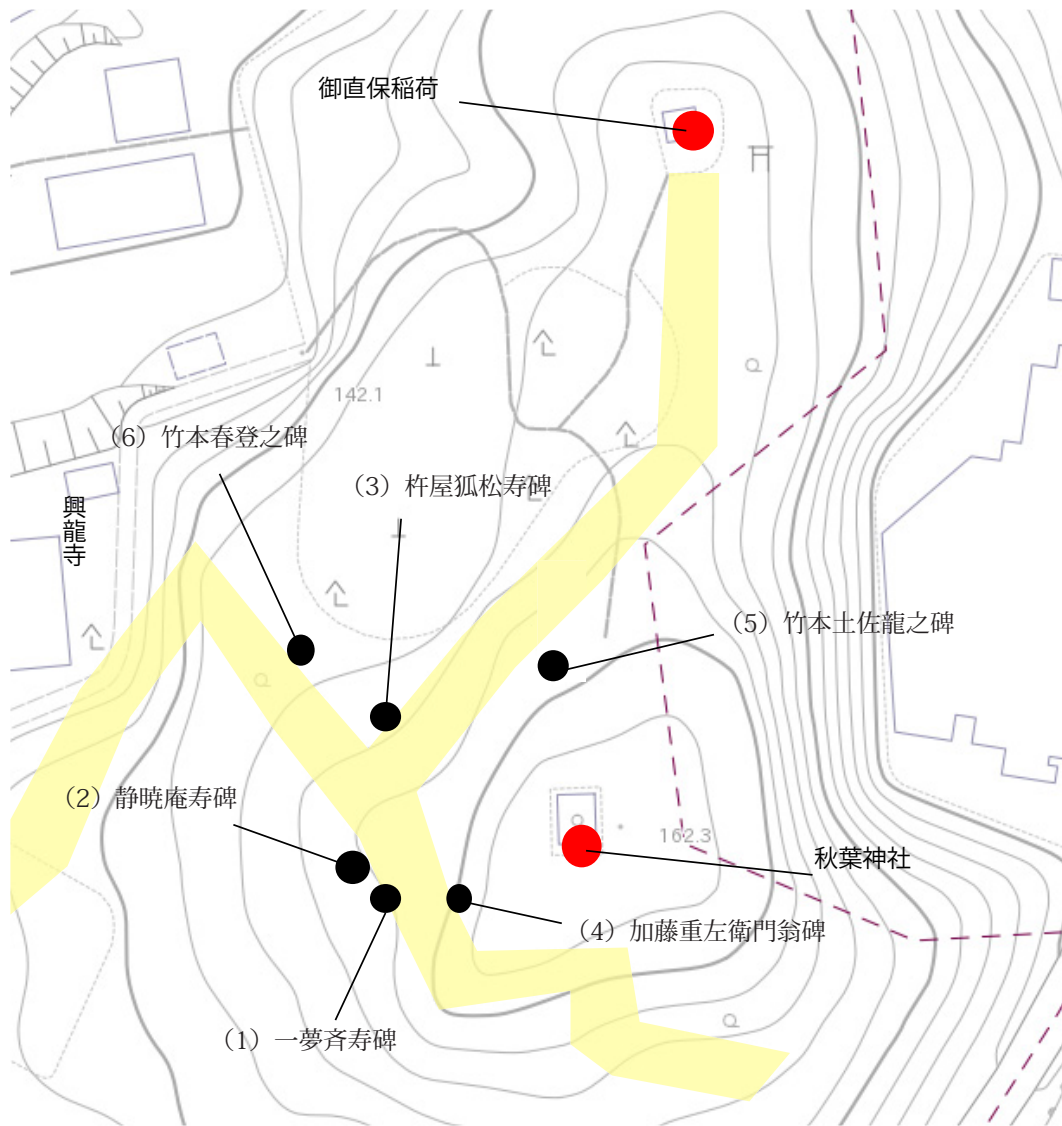
終了・窯垣の小径駐車場にて解散





令和元年9月21日（土） 郷・旧桜町を歩く 予定コース

# 1 城見山 [コース①]



## 御直保稲荷

正一位御直保稲荷大明神。岐阜県海津市にある千代保稲荷、通称「おちょぼさん」の分霊です。稲荷大社は後鳥羽上皇により「本社勧請の神体には“正一位”の神階を書加えて授くべき」と勅許が出されたので稲荷社はすべて正一位を名乗っています。現在城見山にある御直保稲荷社殿は痛みがはげしい状態ですが、以前は瀬戸に住む職人などがお参りにくる場所でした。また、おちょぼ稲荷は商売繁盛の神でもあり、芸者衆の信仰も厚いものでした。明治末期～昭和初期の桜町周辺が花街として賑っていたその片鱗がうかがえます。



御直保稲荷



「正一位御直保稲荷大明神」石碑

しょうでんりゅう いちむさい  
 (1) 正伝流 一夢斎寿碑 (華道)

正伝流とは、明治時代に小西一夢斎が興した流派です。初代家元である一夢斎の詳しい情報は残っておりませんが、二代目家元である一有斎（稲垣兼四郎）に関係のある文書「今村・稲垣佐喜雄家文書」から流派の状況を少し知ることができます。

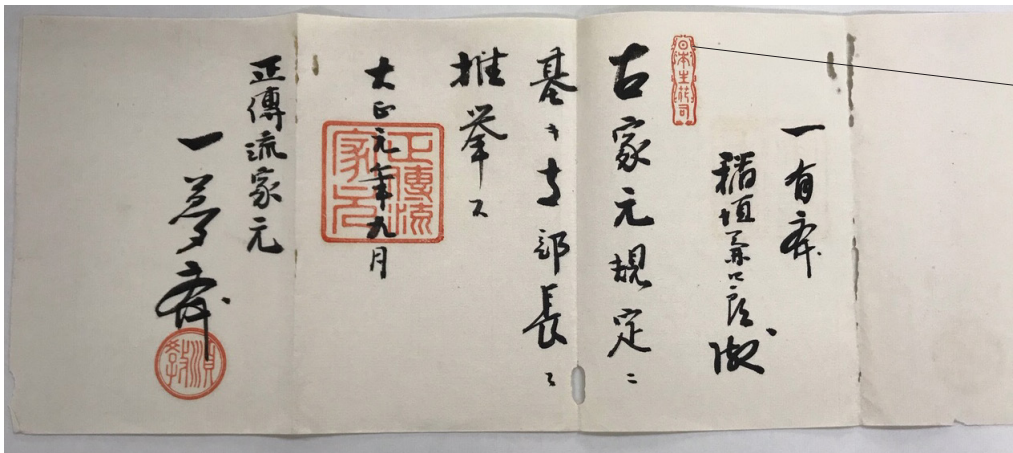
正伝流推薦状などに「日本生花司」とありますが、これは松月堂古流で使われており、「日本生花司」の五文字を流名に冠して、松月堂古流との関係を示すもので、一夢斎が松月堂古流を学んだ可能性があることがわかります。

正伝流のいけばなは壺や瓶など深い花器に生ける技法の「瓶花」を主に行いました。

「当流ハ瓶花ニ於テ天地人道ノ奥義ヲ究メ精神上ノ修養ト併テ斯道ノ本文ヲ全ウスルヲ以テ目的トス」（『正伝流家元規定』より）



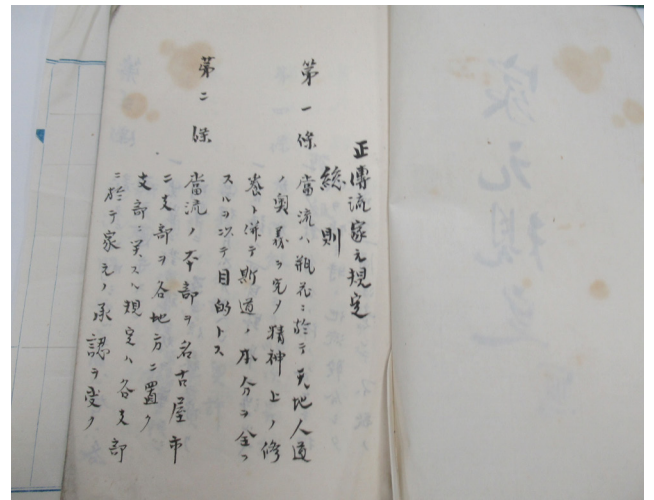
正伝流生花



正伝流 推薦状



一夢斎寿碑  
 (大正13年11月建立)



正伝流家元規定  
 (上記三点文書は「稲垣佐喜雄家文書」より)

## (2) 千秋流 <sup>じょうぎょうあん</sup> 静暁庵寿碑 (華道)

千秋流とは、華道の名家であり、<sup>みしやうりゆう</sup>未生流から分かれてできた流派です。その歴史は古く、嘉永5（1852）年に浄土宗鎮西派自然院第11代住職秦随誉上人によって創設されました。

秦随誉上人は、若くして風流の道を好み、諸流の美点を研究しました。のちに未生流の門に遊んだ上人は暫くして千秋庵鶴翁と雅号を改め、多くの人とその門に学びました。

千秋流が瀬戸に伝わったのは明治12（1879）年のことで、<sup>いつきやうさい</sup>加藤一橋齋が長久手の岩作から瀬戸に移住し、有志にいけばなを指導されたことがその興りです。

石碑にある静暁庵は本名を中島ふじと言ひ、赤津に生まれた人物です。彼女は一橋齋の孫弟子であり、湯之根町に指南所を設け、多くの弟子に華道と茶道を教えました。

## (3) <sup>きねやこまつ</sup> 杵屋狐松寿碑 (長唄)

杵屋とは長唄三味線の流派で、諸説ありますが元和年中（1615～1624年）に杵屋勘五郎が江戸で興した流派とされています。杵屋は多数の流派があり、多くの名曲を残しています。

杵屋狐松は本名を水谷さくといひ、瀬戸で民衆に対し三味線を教えた人物です。彼女は杵屋松三郎の教えを受け、のちに名取となりました。寿碑は生前に建てられることから大正期を中心に活躍した人物であると推測されます。



静暁庵寿碑  
(大正13年5月建立)

## (4) <sup>しげざえもん</sup> 加藤重左衛門翁碑

加藤重左衛門は藤原町を命名した人物です。命名当時の藤原町は、瀬戸川左岸の宮脇橋から公園橋付近までの通称「中堤」と呼ばれている範囲でした。『改訂瀬戸ところどころ昔話』では、大正7（1918）年頃に陶祖藤四郎の宅跡をめぐり、東部と西部が争いました。ついに東部は藤原町から杉塚町へと名前を変えてしまいました。藤原町と名付けた加藤重左衛門は陶祖の宅跡は西部だと主張していたためこの記念碑を建立したとされています。

(谷口雅夫『陶都瀬戸村物語』オリ  
ンピア印刷、平成31年より)



杵屋狐松碑  
(大正10年11月  
建立)



加藤重左衛門翁碑  
(大正10年7月建  
立)

とさりゅう  
(5) 竹本土佐龍之碑（義太夫）

竹本土佐龍は、名古屋に住み民衆に義太夫を教えた四代目竹本土佐太夫の娘です。土佐龍も義太夫を教えたと推測できますが、瀬戸でどのような活躍をしたかは詳らかではありません。

はると  
(6) 竹本春登之碑（義太夫）

竹本春登はおそらく義太夫の一派の者であると推測されますが、詳しいことはわかりません。

義太夫とは、竹本義太夫が祖の浄瑠璃の一派のことで、貞享元（1684）年大阪道頓堀に竹本座が創設されました。なお浄瑠璃とは物語を三味線の伴奏で語る音楽のことで、声を担当する「大夫」と、三味線弾きが対になって演奏するものを指します。

明治維新後になると女義太夫なども流行し、歌舞伎と並んで芸能人気の頂点にありました。瀬戸では栄座、陶栄座、陶元座などで公演が行われていたこともわかっています。

「元は日小屋を作りて為したりしが、小牧町にては明治十年頃、中町に豊栄座を設け、之を廃すると共に、明治三十三年の頃片町に甲子座を建設し、越えて明治四十四年の頃、桜井に小桜座を設けたり、瀬戸町には栄座、陶栄座、陶元座あり、…時々勸善懲悪の劇を上映して、娯楽に供し、又近時、活動写真連鎖劇、義太夫等を興行して観覧に供す。」（『東春日井郡誌』大正 12 年、東春日井郡）



竹本土佐龍之碑（大正 10 年 10 月建立）



竹本春登之碑（大正 13 年 11 月建立）

こうりゅうじ  
興龍寺

じょうけんさん

城見山興龍寺。高野山真言宗の寺で、開基は快導和尚。本尊は千手千眼十一面観世音菩薩。



興龍寺

## 2 昔の面影が残る街並み

### 古窯（瀬戸染付工芸館）[コース②]

古窯とは本業窯・丸窯とともに近代に活躍した登り窯の一種です。

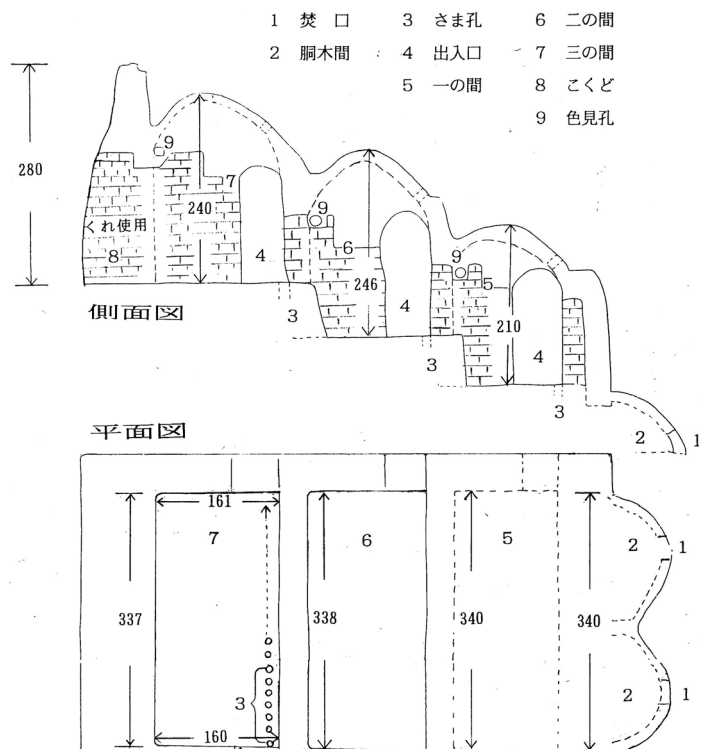
本業窯が陶器を焼成、丸窯が大型磁器を焼成したのに対し、古窯は中・小型の陶器と磁器を併焼していました。構造は他の登り窯に比べて、小型で急勾配となっています。

瀬戸染付工芸館の古窯は、主に小型の磁器製品を焼成していました。もとは現在地より南の城見山にありましたが、昭和22年に移築、昭和39（1964）年まで使用されていました。

瀬戸市で唯一残された古窯であるため、平成9（1997）年に瀬戸市指定文化財に指定されています。平成19（2007）年11月30日に経済産業省により「輸出製品開発や国内需要拡大による中部、近畿、駿人の窯業近代化の歩みを物語る近代化産業遺産群」に認定されました。

### 古窯（こがま）実測図

単位 cm



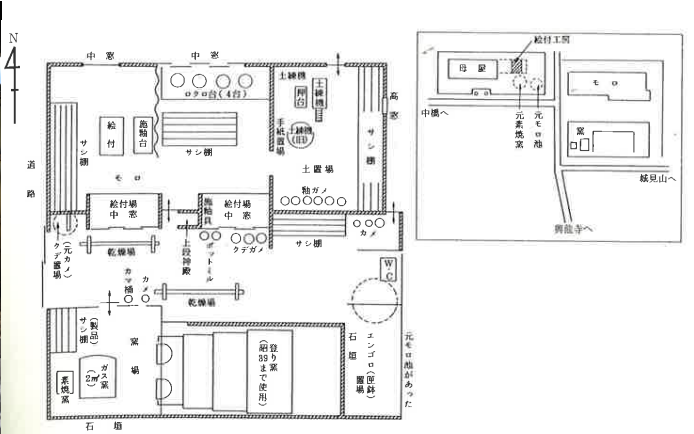


図7-6 瀬戸・I家のモロ見取図(『愛知の諸職調査』より)

### 古窯

この古窯は幕末から五代まで続いた伊藤伊平家で使用されてきたものであり、代々染付磁器が生産されてきました。

## 旧蛭子湯 [コース④]

旧蛭子湯は、木造2階建てで、1階脱衣場の天井を高くして換気のために前面に高窓を設け、2階建ながら内法上部に霧除け庇を設けて屋根が三重になっています。これは銭湯という建築種に起因する特徴であるといえ、伝統的な建築を残しながらも近世には見られなかった構成の建造物です。

古くは市内に40軒ほどの銭湯がありましたが時代とともにその数は減少し、今では2軒のみです。

大正時代に入ると、銭湯業界に「改良風呂」以来の大きな変化が現われます。それが、「タイルの使用」です。銭湯以外にも商店のショーケースや理髪店、写真館、遊廓あたりで盛んに使用されました。大正時代になると銭湯では板張りの洗い場や木造の浴槽は減少し、陶器のタイル敷の浴槽が好まれるようになりました。東京では大正12(1923)年の関東大震災以後、特に急速に普及していきました。

現在の蛭子湯(南西より)

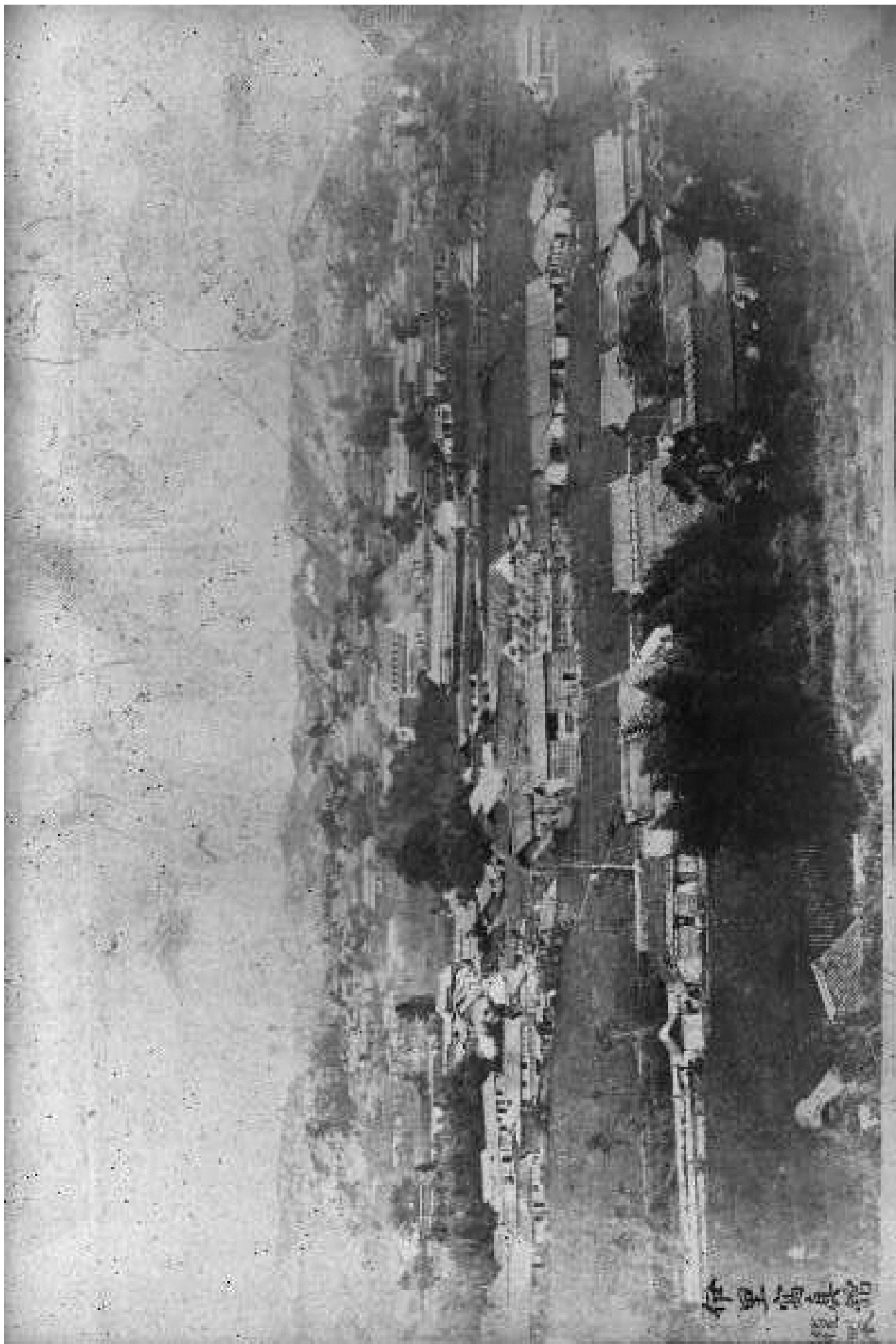


## 旧桜町界限 [コース⑤]

旧桜町界限は、宝泉寺門前町が発達すると同時に形成され、およそ明治末ごろまでに広がった町です。花街やアウトレットの陶磁器店(ペケ屋)が南側の大廻戸に形成され、北側の瀬戸川沿いに「汽車長屋」が連なっていました。かつては200人もの芸妓が瀬戸にいたといわれ、深川神社の石柵や、城見山の石碑には寄付者として多くの名が残されています。

そんな往時の瀬戸を賑わせた旧桜町界限や深川神社南の茶屋街にあった置屋は、昭和初期に新開地へと移ったものが多く、終戦後には置屋はほとんど桜町界限にはみられなくなりました。





明治29年の深川連区(前田・薬師)風景(フォトスタジオ伊里提供)

## 瀬戸永泉教会礼拝堂 [コース⑥]

この礼拝堂は、瀬戸永泉教会（日本基督教団（プロテスタント長老派））において礼拝を行う中心的な建物で、明治33(1900)年の建造とみられ、昭和5(1930)年には上部半円形の飾り窓を取り付けるなどの改修工事を行っています。木造平屋建てで、桁行6間梁間4間の瓦葺建物です。

屋内天井部分には、洋風建築にみられるトラス構造と、土蔵等に多くみられる和小屋状の貫の構造が組み合った、和洋折衷の特徴がみられます。移設せず現存する明治期の教会建築は、愛知県内ではほかにメソジスト西尾教会（西尾市、明治30(1897)年竣工）やカトリック主税町教会礼拝堂（名古屋市東区、明治37(1904)年建設）等が知られているのみです。建造から今日に至るまで基本構造が変わらず教会堂として現役である瀬戸永泉教会礼拝堂は、大変貴重な文化財です。



瀬戸永泉教会礼拝堂（北西より）



大正4年頃の瀬戸永泉教会礼拝堂  
（『目で見える瀬戸の100年』平成2年、郷土出版社より）



礼拝堂天井裏小屋組（南東より）

## 石神社 [コース③]・山口神社 [コース⑦]

この二つの神社は寛文12（1672）年成立の『寛文村々覚書』、宝暦2（1752）年頃成立の『張州府志』、天明8（1788）年成立の『張州雜志』、寛文～文政年間（1788～1822頃）成立の『尾張徇行記』などでその名を見ることができます。

両神社ともいつごろからか年貢が免除される除地となっており、1930年刊行の『瀬戸現勢地図』では両社とも瀬戸五社に含まれ、窯神社・須原社と同様に重要な神社であると認識されていました。

『寛文村々覚書』では瀬戸村に社四ヶ所あるとされており、山神・社宮神・八王子・権現は一町二反七畝八歩（およそ13000㎡弱）の除地であるとされています。

石神社の祭神は猿田彦命で、古事記では天孫の道案内をした国つ神です。

山口神社の祭神は大山祇命で、伊弉諾尊・伊邪那美尊の子であり、山を司る神です。



現在の石神社



現在の山口神社



山口神社の古写真（平田写真館撮影）  
撮影年不詳

## 今後のスケジュール

<11月>

せと歴！ 秋の馬ヶ城 歴史と自然を巡る

日時：11月30日（土） 午後1時～4時

集合場所：馬ヶ城浄水場 ※台数に限りがあるためなるべく乗り合わせでお越しください

解散場所：同上

内容：馬ヶ城浄水場内の施設と馬ヶ城の森の中に数多く残る中世の窯跡を  
解説付きで巡ります。

参加費：無料

定員：20人

※申し込み方法等、詳しくは広報せと11月1日号に掲載します。

## 瀬戸市歴史文化ホームページの新設

昨年度、新たに瀬戸市の歴史文化に関するホームページ「愛知県瀬戸市」を開設しました。

これまでに開催した「まちめぐり」の資料や瀬戸の古い町並みなどの写真、さらに昨年度刊行した瀬戸市歴史文化ガイドブック「千年続く誇りを巡る旅」、瀬戸を知るテーマ別ガイド「のんびりじっくりせとマップ」、瀬戸の百科事典「瀬戸ペディア」などが閲覧・ダウンロードできます。ぜひご活用下さい。

アドレス：<http://seto-guide.jp/>



本事業は平成31年度歴史文化基本構想を活用した観光拠点づくり事業（文化芸術振興費補助金）を活用して実施しています。

主催：瀬戸市歴史文化基本構想を活用した観光拠点形成のための協議会（瀬戸市地域振興部文化課）